

昭和46年2月1日 第3種郵便物認可
平成22年10月1日発行（毎月一回一日発行）
俳句雑誌 沖 第41巻第10号

俳句雑誌「おき」

沖

10月号

創刊40周年記念号

沖 発行所

志を持った結社をめざして

能村 研三

「沖」はこの十月号をもって創刊四十周年を迎えた。創刊の昭和四十五年（1970年）という年を振り返ってみると、高度経済成長真っ只中で、華やかな時代を背景に大阪で日本初の万国博覧会が開催された年でもある。まちにはミニスカートが闊歩し、新宿には高層ビルが建ち始めた時代である。

先師登四郎は五十九歳、林翔先生は五十六歳、私は二十一歳であった。この年の三月には桂信子の「草苑」、「沖」と同じ十月に森澄雄主宰の「杉」が創刊され、さらにその翌年には野沢節子の「蘭」が創刊されるなど、結社ブームの切っ掛けとなり、時代を先取りした感があった。

先日、同人の鈴木良戈さんから市川の勤労福祉会館で行った創刊記念大会の八ミリビデオ（DVD化したもの）をいただいて懐かしく拝見した。創刊当時に集まった人たちも今ではほとんどの方がおられないが、そのお一人お一人に、能村登四郎と共に新しい結社を運営して行こうとする輝かしい眼差しがあった。創刊号の投句者が八十八名という末広りの数で始まったことは「沖」の逸話としても有名だが、俳壇に羽ばたけるような新しい結社誌としてそれぞれが志をもち、その心には燃えるものがあった。

しかし、その後のバブル崩壊、景気の低迷、そして急速な高齢化や、介護問題などなど、

俳句を取り巻く環境は大変厳しいものがあり、結社の数こそ増えてはいるが、群を抜いて隆盛になった結社は見当たらない。そして、若者も安定した仕事につける人が少なくなり、俳句にかける時間の余裕が無くなってしまったのが現状である。このような社会状況は、俳句だけに限らず日本の文化環境全体にも及んでいる問題ともいえるようだ。だがこうしたことをいつまでも嘆いてばかりはいられない。

私はこの大きな節目の年に、第六句集『肩の稜線』を上梓することになったが、その中に次のような句を載せている。

初空ヘルネッサンスの志

迷ふなく素志を貫く去年今年

私が数年前に掲げた「ルネッサンス沖」の気持を詠んだものだが、それは結社の世襲性について自らを戒め、先師や先輩たちが築いた「沖」を、単に継承していくことではなく、常にその時代を読み、その時代の中での「伝統と新しさ」を求めて、「沖」誌は変わるものとなく、創刊の志をもった結社誌として運営していきたいと思ったからである。これは、今後変わることもなく持ちつづけなければならないことで、「沖」四十周年の大きな区切りの後、徐々に具現化していきたい。

「沖」に集まる人たちは自らの俳句が上達したいとの思いで集まって来られるのだろうが、これからの結社「沖」は、「志を持った人が集まり、志をもった人が語り合い、ぶつかりあい、切磋琢磨し、そして俳句の未来に向けて、志を実現していく結社」にしていきたい、と思っている。

三人の師

能村 研三

読み止しは指栞してハンモック
日焼子の喧嘩の果ては友となる
朝刊の古きねたなり土用風
揃うては激辛組の日焼顔
炎帝よ無帽の我もゐたりけり
安易なる数値の評価風死して
本坊に粥座百席夏暁けて



サン
グ
ラ
ス
か
け
て
信
心
深
き
か
な
夜
濯
の
潮
に
干
さ
れ
し
船
住
ま
ひ
か
ら
つ
ぽ
の
頭
に
し
た
き
端
居
か
な
荒
目
刃
の
氷
の
こ
ぎ
り
涼
気
な
る
中
性
化
す
す
む
人
の
世
日
雷
噴
水
の
仕
掛
け
織
り
込
む
展
開
図
倍
々
に
百
味
を
刻
む
盆
支
度
ま
る
め
た
る
紙
に
力
や
今
朝
の
秋
秋
寂
び
ぬ
三
人
の
師
の
ベ
レ
ー
帽
秋
灯
や
宿
直
の
父
思
ひ
だ
す
剥
く
前
の
林
檣
の
冷
え
を
頬
に
当
つ

アドリブを利かす挨拶良夜かな
かき分けて芒原より測量士
嘘のまま通すがよきと萩の声
布目なる釘の頭や厄日前
鍵穴に挺摺り釣瓶落しかな
辛抱の三年五年やちちろ鳴く
盆過ぎて船底袖の作務衣かな
胡桃には鬼と姫の名手に包む
くるくるが転訛したりし胡桃の名
水底の石に秋日の差してをり
三行の台詞忘れて鳩吹けり



地下莖の勢ひあまる何首烏芋
秋揚げや鋤の楔を締め直す
台風裡肘笠雨に遭ひにけり
表札は宇涯の遺墨夜露降る
飲食のための行列秋日なか
名を保持たぬ山に灯りや草泊
竜淵に潜み答は二つかな
立ち位置は佳景の角度望の夜
雁渡し田端年譜に父の名も
秋暮るる父青春の田端かな
望の潮不惑の「沖」と耳順我

蒼茫集



十八柱

遠藤真砂明

なに見るとなき炎天のひとり佇ち
さそり座へ五色変化の揚花火
ばた足のまだつたなくて青浮輪
大國魂神社吟行三句
荒神の杜に秋立つ真綿雲
まつつぐにいけと指さす夏櫛
国衙暑し雄ごころ立ちに十八柱

誌 齡

千田百里

祝・沖四十周年
誌齡不惑にしていよよ天高し
金魚掬ふ右往左往の手の数や
一抜け二抜けそして千切れし踊の輪
府中吟行三句
秋の初風丹の列柱を渡るかな
葉月ぐもりや武蔵国府のうまし蕎麦
夏惜しむ奥州攻めの道の辺に

葉裏返し

久染康子

奔流に枝川乗れず青胡桃
大夏野葉裏返し自性院の風渡る
青嶺また青嶺の芯に先師の碑
片陰に帽子の紐をゆるめけり
櫛並木に涼風の一直線
パナマ帽見掛ける度に翔先生

京所道

安居正浩

気遣ひを団扇の風に乗せてくる
七夕や妻は毎日家にをり
飛沫いま光となりぬ滝行者
濁流の息抜くおはぐるとんぼかな
すててこの軽さ体操したくなる
京所道とや涼風をまづ通す

安房の海

松本圭司

握りたる掌の柔らかき生身魂
記憶まだありありと国敗れた日
敗戦日ご飯の白さまぶしめり
盆荒れの雨針となり鞭となり
で虫の角の向うに安房の海
まだ少し無理の利くわが裸なり

八月過ぐ

北川英子

花火師の間合ひといふも技のうち
鶏頭と対しいささかびびりをり
大方は戦知らずの盆踊り
八月過ぐ多くの死者と向き合ひて
言はずもがななりしや扇荒使ひ
二人して秋風にさへつまづきぬ

夕顔

田所節子

耳鳴りは大暑の地球軋む音
サングラス外してやつとパパの顔

露けしや推敲しげき賢治稿
夕顔自性院をとろり煮ふくめ待たれをり
二の足を踏む噴水の上の水
大将が駆くれば駆けて捕虫網

鹿踊

成宮紀代子

咲き登る凌霄自性院栄え
晩夏光賢治推敲おびただし
ササラ立て紅顔現るる鹿踊
爽涼の櫛通りも武蔵ぶり
秋蟬にかつと日の照る高札場
香水や打ち解けがたく去りがたく

夏終る

菅谷たけし

ルピナスの五色揃ふは富むごとし
人責めることを知らざる扇風
伽羅路を煮返す父母の知らざる世
向日葵や人は妥協を重ねつつ
電柱の影さへちぢみ真炎天
グラウンドに影深く折り夏終る

三 伏 吉田政江

向日葵の中の本後向き
大崑蕩魔が差したるやうに咲く
三伏や傍のものさへ動かさず
今日の知恵けふ使ひきり凌霄花
生れ月を逝く炎帝に誘はれ
高札場囲ふ秋暑の手擦れ堀

帰 帆 松井志津子

白南風の潮目あかるき帰帆かな
一滴の水よりかろし掌の螢
句碑涼し早池峰よりの風ありて
後ろ手の賢治来そうな青田道
河童忌や遠くの橋に灯がともり
水を打つもう晩年と言へる齡

角が大事 千田 敬

夫婦岩怒濤の中に夏の注連
けさ秋の愛しきものに木綿皺

新豆腐角が大事と沈むなり
五体ばらばら名ばかりの今朝の秋
浮雲を鷗尾に繋ぎて新松子
気がつけば顎が掌の上八月尽

力出しきる 望月晴美

生くるとは力出しきる土用波
視野をはみ出すアルプスの青嶺かな
けやき並木炎帝の威のおよばざり
知らず来て祭の活気貫ひたる
山百合の火種と紛ふ花粉かな
背を割つてほつと極暑の旅衣脱ぐ

をとこの 荒井千佐代

黒猫が尾を立て過ぐるパリー祭
滝壺へかづらを掴みつかみつ
出棺の曲弾き了へて炎天へ
茄子咲きて常にをとこの三步あと
氷菓舐めをり骨盤で嬰を支へ
ヨットの帆すこし汚れて戻りけり

鍾 辻 直美

風鈴に紙いちまいの鍾かな
秋立ちぬ不在の椅子の背凭れに
紅うつくしく新諸の供へらる
むかへ火や本卦帰りも一昔
避暑宿へ抱へて来たる紙袋
避暑期果つ鉄の鎖に羽根残し

大 暑 高橋あさの

土を搔き軍鶏うづくまる大暑かな
みちのくのしんと出穂待つ青田風
北上川のかくも濁りて夏の果
さりげなく見舞ふ心の帰省かな
標柱標の影まで灼けて国府跡
馬場大門抜くるけやきの風は秋

海 開 き 鈴 木 良 戈

夕影の伸びし暈目桜桃忌
浦安の地図の青減る海開き

三伏の封を切らずに新刊書

いくつもの片陰拾ひ帰宅せり
向日葵の精も欲しくて誕生日

青 嵐 大畑善昭

肋骨を四本折つて熱帯夜
東病棟二階一号葛の花
師の句碑に弟子や孫弟子青炎天
青嵐に一快事あり欠席す
背泳にあらずベッドに夏病衣
短夜の洩瓶の用にベルを押す

父の唄 上谷昌憲

冷し酒一つ覚えの父の唄
放牛の盤石の艶喜雨走る
ごきぶりの時空をすべるかたちかな
オープンキャンパスどの樹にも油蟬
籐寝椅子本の帯など無くもがな
園真昼噴水の穂に抱きつく子

潮鳴集

水流

甲州千草

善昭さん癒えよみちのく青田風
水流の力んでをりぬ青胡桃
サイダーの泡に音あり長寿国
乾杯のひとりはノンアルコール夏
朝曇ツボ押しサンダルの痛し

宮の土俵

佐々木よし子

「池波」とのみの墓石の涼しかり
広島や夜も鳴きつのる油蟬
端居して海の入り日の虜かな
夏終る宮の土俵に罅走り
シーソーの取つ手ひんやり秋に入る

夜間飛行

鳥居秀雄

府中・墨大門

もののふは名をこそ惜しめ夏櫂
口中に麩菓子ばさつく我鬼忌かな
彼は元夜間飛行士星涼し
夜光虫生みつつ沖の暗さかな
終戦日父はきまつて散髪へ

水のごと

内山花葉

触るるものみな熱もてり原爆忌
白さるすべり百歳の死は水のごと
母恋^{母恋}母^母のひと世透く
なす紺の羅母のひと世透く
新涼の風の交はる高札場
意味もなく時計見る癖終戦日

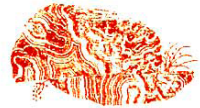
火入れ窯

佐久間由子

春野行く牧の仔牛に会へるまで
永き日の畦を塞ぎて猫車
小流れに日のとろとろと蝌蚪の国
啓蟄の畦が息づく水明り
三角の風を孕みてヨット馳す
昼顔の渚や指呼に魚跳ねて
燃えてゐる茎のさみどり曼珠沙華
藁塚の合掌立ちでありしかな
駈け出して花野の風になりし子よ
ハングライダー風滑らかに豊の秋
鶏鳴のひときは高く稲架日和
つる引けば風の高さの烏瓜
岬道へ風の流るる赤蜻蛉

仰向けの空のしじまや捨案山子
窯元へ柿の色づく道しるべ
窯神にささぐ盛り塩鵲高音
攻め焚きの窯口小さき柿日和
窯番の子犬が鳴いて十三夜
窯の火を夫婦で守る鵲日和
隼の翔くる高嶺や火入れ窯
風が打つ夜の鳴子を聞き澄ます
山垣に日輪高し冬野行く
返り花きらりと夕日とどめたり
風音が奔る師走の千枚田
山鳩の翔つやしぐるる千枚田
野ざらしの石の円卓冬ざるる
凍滝の一枚岩や神宿る
枯れ蔓の己れ巻きつつ枯れにけり
植込みに移る日差しや春隣
海風に渺々と鷹一羽かな

沖作品



噴水へ年相応の間合かな
甚平を着て高階の桃源郷
コピー機の夏果ての紙吐き出せり
内陣に日差し一条原爆忌
自転車の大き背中や休暇明け
山の子が海を見てゐる夏休
四万六千日大川は雨を吞む
柏手は木霊となりて山開
夏の果岬に立つてみたくなる
屑金魚水切る和紙に倒さるる
蚊柱や大望はなく多忙なり
口一文字青梅の堅さかな
秋立つや香ばしき白湯たまはりて
古代土器爽籟みほふ「国」の文字
梶の葉に能筆走り風は来ぬ

市川市

佐々木 群

神奈川

福島 茂

千葉

上田 玲子

能村研三選

文人とおぼしき甚平魚屋に
叩きつつ雨戸を繰れり半夏雨
少年の父を越えゆく夏の山
今日の宿マツチ箱ほど大夏野
荒事の役者の目玉涼しかり
魂のこゑめく瀬音浦上忌
少年の声まで日焼して帰る
語り部に子等のまなざし長崎忌
川石にちちの相あり浦上忌
浄瑠璃の首の百態半夏雨
己が声聴き入る容蟬の殻
昼寝して一日短かくなりけり
冷奴仲よしけんかといふ処世
青鰻や日課のひとつほめころし
短夜に残して来たる長き夢

神奈川

鈴木 浩子

長崎

末田 洋

岩永 充三

沖作品 15句選評

*

能村研三

噴水へ年相応の間合かな

佐々木 群

噴水は公園や庭園に水を噴き上げる装置として人工的に作られたもの。ある時は宙に勢いよく水があがったり、落下する水をいろいろ演出する。装置に仕掛けられたものであるが、人々は涼を求めながらその間合を楽しんでいる。若い時は時間的にも心の余裕がなく、公園の噴水の前にたたずんでいる時間もなくただ通り過ぎるだけであった。年をとるにつれ、時間的にも余裕が出来たせいか、噴水の動きを見るにも見方が変わってきた自分を不思議にも思った。噴水が次々に織りなす演出の間合を楽しめるようになった。

四万六千日大川は雨を呑む

福島 茂

四万六千日は七月九日、十日に東京の浅草寺の境内にたつ鬼灯市のことだが、東京ではまだこの頃は梅雨も明けてはおらず、むしろ梅雨の末期で激しく雨が降ることがある。大川は隅田川

のことだが、作者もこの鬼灯市に出かけ、あいにくの雨となつてしまった。降りも強くて訪れた人も驚かされた。浅草寺と隅田川は昔から切つても切れない縁にあるが、大きく雨を呑みこんでいく大川のありようが逞しくもみえた。

蚊柱や大望はなく多忙なり

上田 玲子

この句、「大望」と「多忙」という言葉の響き合いが面白い。読みにすると「タイボウ」と「タボウ」で「イ」が一字抜けただけである。「大望」と言う言葉は「大望を抱く」というように使われ、身のほどを過ぎたのぞみでもある。しかし人間は多忙なことはある意味では幸せなことで、あくせくしながらも充実した自分が輝いて見えることもある。季語として使われた「蚊柱」も、塊で飛び交っている蚊の群集の中の一匹の蚊が、さぞ自分であるかのように暗示させて面白い。

文人とおぼしき甚平魚屋に

鈴木 浩子

私が住む市川もかつては文人と言われる永井荷風や幸田露伴が住んだ町であるが、鈴木さんの住まわれている茅ヶ崎あたりも現在文人が住まわれている町なのだろう。こうした人たちと普段の生活の場面を共有できることは、ある意味では羨ましい。文人も物を書くだけでなく、いろいろ拘りを持っている方が多く、食通でもあるから魚を買うにもスーパーなどで買わずに、昔からの馴染みの魚屋で買っているのだろう。甚平を着た文人がとても身近に感じられる一瞬でもあった。(以下略)